

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意(12月)【ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)、野菜類:シロイチモジヨトウ】	1
野菜【きゅうり、あぶらな科野菜、野菜類】	2~4
果樹【みかん】	4
その他注意すべき病害虫【トマトキバガ】	5

特に発生に注意(12月)

ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)



成虫



えそ条斑病の被害葉

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘形のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が拡大して融合し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウィルス病に対する治療方法はないので、ウィルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内及び周辺の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、リーフガード顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜類:シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ ねぎでは葉身内に食入り、薬剤が届きにくくなるので、卵塊の除去及び集団でいる発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレオフロアブル(ねぎ、キャベツ、しゅんぎくなど)、グレーシア乳剤(ねぎ、結球あぶらな科葉菜類、しゅんぎくなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

病害虫発生予察注意報第3号「シロイチモジヨトウ」(令和7年9月2日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2509_r7chuuihou03_shiroichimojiyotou_soshin.pdf

次回の情報は12月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

野菜

きゅうり

アザミウマ類(ミナミキイロアザミウマ:黄化えそ病)



ミナミキイロアザミウマ被害葉※



黄化えそ病被害葉※

特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマの発生初期は、葉の葉脈沿いにカスリ状の白い斑点を生じる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマがMYSV(メロン黄化えそウイルス)を伝搬し、キュウリ黄化えそ病が発生する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。

防除のポイント

- ◆ ウィルス病に対する治療方法はないので、ウィルスを媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- ◆ 施設の開口部に目合い0.8mm以下の赤色ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底するとともに、黄化えそ病の発病株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設内を除草したのち、2週間以上密閉して、ミナミキイロアザミウマを餓死させる。

コナジラミ類(タバココナジラミ:退緑黄化病)

タバコ
コナジラミ※

成虫*



退緑黄化病被害株※

特徴

- ◆ タバココナジラミやオンシツコナジラミが加害する。
- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ 多発すると株全体が弱り、収量も減少する。
- ◆ タバココナジラミがCCYV(ワリ類退緑黄化ウイルス)を伝搬し、キュウリ退緑黄化病が発生する。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・融合しながら徐々に黄化する。
- ◆ キュウリ退緑黄化病と黄化えそ病は見た目で見分けることは困難である。

防除のポイント

- ◆ ウィルス病に対する治療方法はないので、ウィルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.4mm以下のネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底するとともに、退緑黄化病の感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設内を除草したのち、2週間以上密閉して、タバココナジラミを餓死させる。

病害虫発生予察注意報第4号「コナジラミ類」(令和7年9月30日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2509_r7chuuihou04_konaziramirui_soshin.pdf

あぶらな科野菜

コナガ



幼虫 ※



成虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 発生初期に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤(キャベツ、ブロッコリー、こまつななど)、ディアナSC(キャベツ、ブロッコリー、こまつななど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローション散布を行う。

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。
使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

野菜類

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ あぶらな科野菜、なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。また、卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、アニキ乳剤(キャベツ、なす、さといもなど)、ヨーバルフルアブル(キャベツ、なす、さといもなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローション散布を行う。

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。
使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

病害虫防除情報「チョウ目害虫に注意！」(令和7年7月9日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2507_r7bojo02_choumoku_soshin.pdf

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 幼虫の捕殺は、被害軽減効果が大きい。また、摘除した茎葉や果実に、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し、処分する。
- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバソンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、ディアナSC(なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローション散布を行う。



卵

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所

*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）

無断転載を禁ずる。

病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

アブラムシ類



モモアカアブラムシ

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、コルト顆粒水和剤(はくさい、レタス、ねぎ、キャベツなど)、トランスフォームフロアブル(はくさい、レタス、ねぎ、キャベツ、ほうれんとうなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

果樹

みかん(越冬対策)

ミカンハダニ



被害葉

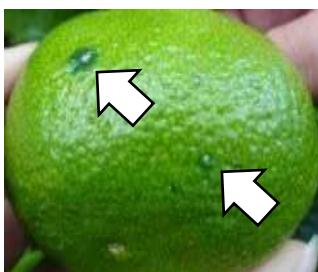
特徴

- ◆ 果実や葉に寄生し、吸汁する。吸われた部分は、色が抜けて白くなる。
- ◆ 日当たり、風通しの悪い密植園や枝葉の混みあつたところで多発する。
- ◆ 冬期は低温のため、増殖は抑えられるが生息はしている。春になり暖かくなると、増殖を開始する。

防除のポイント

- ◆ 収穫後の園では、12月中～下旬にマシン油剤(機械油乳剤95(かんきつ、ハダニ類の越冬卵)、ハーベストオイル(かんきつ)等)による防除を行う。
※樹勢が弱っている場合は、冬期のマシン油剤で薬害(落葉助長)が生じやすいので、3月中～下旬に成分97%製剤のマシン油剤(ハーベストオイル等)を散布する。

カイガラムシ類



ナシマルカイガラムシ被害

特徴

- ◆ 葉や枝、果実に寄生し、多発した場合は、樹勢が落ち、果実の商品価値を低下させる。

防除のポイント

- ◆ 収穫後の園では、12月中～下旬にマシン油剤(機械油乳剤95(かんきつ、ヤノネカイガラムシ、その他のカイガラムシ)、ハーベストオイル(かんきつ)等)による防除を行う。
※樹勢が弱っている場合は、冬期のマシン油剤で薬害(落葉助長)が生じやすいので、3月中～下旬に成分97%製剤のマシン油剤(ハーベストオイル等)を散布する。
- ◆ 樹幹や枝に寄生することが多いので、葉や果実だけでなく、これらの部分にも十分薬液がかかるように散布する。



フジコナカイガラムシ被害※

その他 注意すべき病害虫

野菜:トマト・ミニトマト

トマトキバガ



特徴

- ◆ 寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどの主になす科植物である。成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。
- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直徑数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JAに確認する。
- ◆ 施設栽培では、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。

「トマトキバガ 生態と防除」(令和6年3月発行)もご参考ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga_osaka.pdf